

興味ひろがるブックトーク

3E cafe Project team×Library ブックトーク開催結果報告

学園祭期間中に附属図書館で開催した「ブックトーク」は、初めての企画ながら2日間で合計55名にご来場いただき、成功で終わることができました。筑波大生を中心とする「3E cafe プロジェクトチーム」とのコラボレーションにより、学生の個性を生かした活動となりました。前半はTalkerが本を紹介し、後半は紹介した本を展示しながらフリートークを行いました。当日の様子をご紹介します。

1日目 2009年10月11日(日) 参加者16名

テーマ

化学物質との「付き合い方」について考える



熊谷さんによる本の紹介

<請求記号 所蔵館>

『沈黙の春』 レイチェル・カーソン 著 青樹繁一 訳 新潮文庫

<519/C22 中央・図情>

1962年に、海洋生物学者である著者が記した作品。当時の様々な科学的知見や事例をベースにして、DDTを始めとした農薬に用いられている化学物質の危険性を警告しています。

『複合汚染』 有吉佐和子著 新潮文庫

農薬、保存料、添加物…身の回りにあふれている様々な化学物質の危険性を、おだやかな口調で分かりやすく記した著作です。出版は1975年ですが、本質的な部分では日本は変わっていないのでは、と考えさせられる一冊。

『奪われし未来』

シア・コルボーン、ダイアン・ダマノスキ、ジョン・ピーターソン・マイヤーズ 著 長尾力 訳 翔泳社 <519/C84 中央・体芸>

動物学の博士号を持つWWFの科学顧問、シア・コルボーンらによる内分泌かく乱物質(環境ホルモン)の危険性を警告した書。1996年に出版。日本語版は2001年に出版され、環境ホルモン問題が注目されるきっかけとなっています。

『環境リスク学 不安の海の羅針盤』

中西準子著 日本評論社

<519.15/N38 中央・図情>

化学物質をなんとなく怖がるのではなく、定量的に、どの程度危ないのか判断するのに有用なのが、リスクという指標です。化学物質リスク研究の第一人者である著者が、リスクに対する考え方を、データや具体例とともに分かりやすく記載しています。2005年 毎日出版文化賞受賞。

『メディア・バイアス あやしい健康情報とニセ科学』

松永和紀著 光文社新書

危ないか、危なくないか、判断する材料の多くはメディアから発信されています。でも、そのメディアからの情報にバイアスがかかっているとしたら……。元毎日新聞の記者が、そんなメディアの科学報道の特性と、実際に数多く見られる歪みを明らかにしています。

『リスクセンス—身の回りの危険にどう対処するか』

ジョン・F・ロス著 佐光紀子訳 集英社新書 <369.3-R73 中央>

化学物質に限らず、身の回りには様々なリスクがあふれています。それらの特徴を知り、判断するにはどうすればよいか。リスクとはどのようなものか、広く知ることが出来る一冊です。

Talker 熊谷 現さん(生命環境科学研究科修士2年)

ブックトークという言葉すら知らなかった僕が、学園祭で話をするのが決まったのが、約一ヶ月半前。それから当日まで、色々と試行錯誤しながら準備を進めてきました。本を魅力的に紹介するにはどうすれば良いか。どんなストーリーで本を登場させるのがベストなのか。その本の特徴を表現していて、かつ興味深い部分はどこだろうか。本の魅力を改めて考え、探し、本同士のつながりを見つけていく作業は大変でしたが、同時に自分にとっては楽しいものでもありました。

そんなブックトークですが、いざ行ってみると、色々と得るものがあったと感じています。最大の収穫は、本の間につながりが見えたことで、自分自身の考えが整理できたことです。僕の場合は6冊の本をご紹介したのですが、ブックトークのストーリーを考える過程で、それぞれの本のメッセージを自分がどう受け止め、どう整理しているのかが明確になっていくのを実感しました。また、自分自身のメッセージが来場者の方に伝わったということも、純粋に嬉しいものでした。

様々なバックグラウンドを持つ参加者が、一つのテーマについて意見交換を行なったことで、大変有意義なひとときとなりました。



参加者の声(アンケートより)

■ トーカーの各本に対するわかりやすい説明があり、またどの本もとても興味のひかれるものでした。様々な環境問題の中で、現在は温暖化問題が多く取り上げられていますが、その中で”化学物質に対するリスク評価の重要性”という視点で本を紹介して下さったことはとても有意義だと思います。そして、多くの情報の中で自分で取捨選択する大切さを改めて気付かせられました。とても勉強になりました。参加者とトークできたのも良かったです。

(院生：生命環境科学研究科)

■ 違う分野の知識に触れておもしろかった。

(院生：システム情報工学研究科修士1年)



テーマ：本の虫！？になる本



清水さんによる本の紹介 <請求記号 所蔵館> 『すごい虫の見つけた』 海野和男 写真・文 草思社

熱帯のヘンテコな虫、美しい蝶…数々の昆虫がきれいな写真とともに紹介されています！外国の虫だけではなく、「身近にこんなすごい虫がいたんだ！」と探してみたくなること間違いなしです！！

『子どもの生活をゆたかに！つくってあそぼうよ！草花あそび』

向井幸子著 上久保良文絵 重田吉晴写真 偕成社

小さなお子さんがいるお父さん、お母さんにお勧めです！中には、子どもの頃遊んだなあと懐かしくなる草花あそびもあるので？？草木の多い筑波で、ぜひ試してみてください！

『センス・オブ・ワンダー』 レイチェル・カーソン著 上遠恵子訳 新潮社版 <404/C22 中央・体芸>

「親子で自然を…」という、つい難しく考えがちでは？虫や植物の名前なんて教えられないよ」といわずに、まずは外へでて「わあ、すごいね！！」と感動できることが大事だと教えてくれる一冊です。

『手塚治虫の理科教室』 福江純 解説 いそづぶ社

手塚治虫の漫画の中で、トリックやストーリーにつかわれている科学を解説しています。引用された漫画部分からは、「科学のとらえ方」についても考えさせられます。

『命の音が聞こえますか』 柳沢桂子著 ユック社

DNA と聞くと、難しい学問の世界の話だと思いませんか？ 遺伝の仕組みや生命の歴史をやさしい文体で、物語のように解説しています。生命科学がぐっと身近に感じられる本です。

『生命の記憶』 布施英利著 PHP 研究所 <460.4/F96 中央>

30億年前の生命と今生きている私たちとのつながり、また、今生きている様々な種の生き物同士のつながりが感じられます。生命ってすごいなあと生物の歴史に思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

“参加者は親子連れがベスト”と語った清水さんのブックトークは、期待どおりの成果をあげて温かい雰囲気にも包まれました。本を紹介しながら、スライドで虫を上手につかまえるコツを紹介したり、「何の穴でしょうか？」とクイズを織り交ぜるなど、大人も子供も楽しく実の多いブックトークになりました。

Talker 清水 智子さん(生物資源学類4年)

自分の好きな本を紹介すると、自分自身がよく表れるなあということが、ブックトークに参加させていただいた一番の感想です。

今回、私は身近な自然と生き物関係の本を紹介させていただきました。生物に興味をもつと、いつもの道にある穴、虫、葉っぱからたくさん発見が得られ、日常が楽しくなります。そんな興味のきっかけをくれるのが「本」だと私は思っています。なぜなら、実際に虫を捕まえて見て「本当にそうだったんだ！」とか、「こんなおもしろい草があるんだって！探してみよう」…というように、世界がどんどん広がっていくからです。

当日は、対象とした親子連れも数組入って下さりお子さんも興味を示してくれ、楽しくお話することができました。今回のブックトークでは二人とも人気小説などの一般的に「おもしろい」と受け止められている本でなく、理科系の話題でした。ですが、好きな分野を紹介し、共有できるのならこういうのもアリかな、と思えたひとときでした。

参加者の声 (アンケートより)

- 自然に対する好奇心の大切さを思い出しました。面白そうな本があったのでぜひ読んでみたい。(学群生：生物資源学類4年)
- 内容は大変良かったと思います。私自身も読んだ本、読んでみたい本も発見しました。ブックトークの課題は、この機会をどう皆さんに知ってもらうかの工夫ですね。ありがとうございました。(学外者)
- お子さんたちの知的好奇心をくすぐる、魅力的なお話だったと思います。大人も本を読みたくなる紹介とスライドでした。ほんの対象もよく説明されていて、全体として大変実の多い企画でした。(学群生：社会学類4年)
- わかりやすい内容で、すばらしいプレゼンテーションだったと思います。自分の研究にも関連するテーマで参考になりました。(学外者)
- 全部正解できた！(学外者)

